



UNIC Tokyo Dateline UN

August/September 2010 Vol.72

国際連合広報センター

パン・ギムン

潘基文国連事務総長、日本を公式訪問

～広島平和記念式典に事務総長として初出席、長崎を初訪問～



© UN Photo/Eskinder Debebe

潘基文（パン・ギムン）国連事務総長が2010年8月3日から7日まで、日本を公式訪問しました。前回の訪日から1年1カ月ぶり、4度目の訪問となりました。滞在中、潘事務総長は国連事務総長として初めて広島平和記念式典に出席すると共に、初めて長崎を訪れました。両被爆地において犠牲者への追悼、被爆者との対話を行い、核兵器のない世界の実現をめざす国連のメッセージを力強く訴えました。

このほか、最初の訪問地となる東京では、菅直人総理大臣、岡田克也外務大臣ら日本政府関係者との会談、早稲田大学における大学生との対話、衆参両議長への表敬訪問、米倉弘昌日本経団連会長との会談など、幅広い対話の機会をもちました。

8月3日（火）午後ニューヨークより到着した潘事務総長一行は、同夜、飯倉公館において岡田外相との会談・夕食会に臨みました。会談ではまず、核軍縮・核不拡散について、「核兵器のない世界」の実現をめざして国際社会の機運をより一層高めていく上で、国連と日本の協力を改めて確認しました。また、朝鮮民主主義人民共和国（DPRK）の核問題について、DPRKがこれまでの国連安全保障理事会（安保理）の決議および議長声明を真摯に受け止め、問題解決に向けて具体的な行動をとる必要があるとの認識で一致しました（次ページへ続く）。

*本文中の役職は訪日当時のものです。

訪日に関する情報はこちら

<http://unic.or.jp/bankimoon2010/>

INSIDE

潘基文（パン・ギムン）事務総長の訪日を振り返って	1-4
広島平和記念式典における国連事務総長メッセージ（全文）	5
長崎での記者会見から	6
早稲田大学での講演から	7
国連広報センター新所長より就任ごあいさつ	8

<http://www.unic.or.jp/>

事務総長は会談後に行われた**共同記者会見**で、原爆投下 65 周年に長崎および広島を訪問することは大変名誉なことだと述べました【写真①】。そして、日本の国連への貢献は財政面のみならず、気候変動、テロ対策、アフリカでの平和構築、人間の安全保障、ミレニアム開発目標（MDGs）の達成など多岐にわたっており、特に核軍縮・核不拡散については世界のリーダーであると、更なる貢献に期待を示しました。また、こうしたグローバルな課題と並んで、朝鮮半島、アフガニスタン、イラン、スリランカ、ミャンマー、ソマリアなどの地域情勢についても意見交換が行われました。

翌4日（水）は**早稲田大学**において「**平和と軍縮**」をテーマに講演および学生との対話を行いました【写真②】。事務総長は講演の中で「軍縮は国際の平和と安全を構成する上で、最も重要な要素である」と述べ、「広島と長崎の記憶を伝え続け、核兵器のない世界を実現する上で、世界は日本の若者を必要としている」との強いメッセージを送りました。そして日本の若者に対し、国内だけでなくグローバルな課題にも目を向け、解決のためにリーダーシップを発揮するよう促しました。

早大においては講演に先立ち、「**国連アカデミック・インパクト（UNAI）**」の第1回会合も開かれました【写真③】。UNAIは潘事務総長が提唱し2009年に本格化した取り組みで、国連と学術研究機関の連携を図るものです。日本における第1回会合には5つの参加団体である九州大学、明治大学、早稲田大学、中央大学、大阪商業大学の学長らが参加して活発な意見交換を行いました。

この後、事務総長は**鳩山由紀夫元首相**と懇談、**北澤俊美防衛大臣**と会談を行い、午後には**横路孝弘衆議院議長**および**西岡武夫参議院議長**をそれぞれ表敬訪問しました【写真④】。また、渋谷の**国連大学本部ビル（UNハウス）**を訪れ、駐日国連諸機関の代表および国連スタッフとの対話を行いました。

続いて潘事務総長は大手町の**日本経団連会館**を訪れ、**米倉弘昌日本経団連会長**との会談に臨みました【写真⑤】。事務総長は6月、ミレニアム開発目標（MDGs）の2015年までの達成実現に向け、21人の有識者で構成される「**MDG アドボカシー・グループ**」を結成、米倉氏は同メンバーに就任しています。会談では、日本の民間セクターによるMDGs達成に向けた様々な取り組みについて意見交換が行われました。

潘事務総長はその後、**首相官邸**において**菅総理**と会談し、国際社会の主要課題について話し合いました【写真⑥】。会談後の共同記者発表で、事務総長は「日本と国連のパートナーシップは国連が機能していく上で重要な柱の一つ」と述べ、日本の財政面での貢献に加え、アフリカを中心とする開発途上国への積極的な支援に感謝を表しました。国連事務総長として初となる広島平和記念式典への出席については、「私の出席が世界に向けて強力なメッセージとなると同時に、多くの被爆者の皆さんが抱える苦痛と懸念に応える機会となれば幸いだ」と述べました。菅総理は、会談の中で事務総長からハイチPKOへの日本の派遣に対する感謝と、今後も他地域へのヘリコプター派遣に対する期待があったことを明らかにしました。





⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫

©UN Photo/Eskinder Debebe

同夜、(財)日本国連協会会長千玄室氏による「潘基文事務総長を囲む会」が開かれ、国連親善大使・サポーターや日本国連協会関係者が出席、和やかな懇談のひとつとなりました【写真⑦】。事務総長は挨拶の中で「これからも日本における力強い協力者として国連を支援して頂きたい」と述べました。

翌5日(木)午前、羽田から長崎に到着した一行は、国連事務総長の初訪問を待ち受ける大勢の地元メディアと関係者の出迎えを受けました。到着後に訪れた原爆資料館では、黒川智夫館長の説明を受けながら、被爆の惨状を伝える展示を視察【写真⑧】。途中、熱線被害の資料を展示するコーナーでは、爆心地から1.8キロの路上で背後から熱線を浴び、全面に大やけどを負った(財)長崎原爆被災者協議会会長の谷口稜嘩氏が、当時の自身の写真を前に被爆体験を説明し、事務総長は熱心に聞き入っていました。この後、被爆者との対話が行われ、当時の惨状や現在も続く後遺症の苦しみなどについて一人ひとりが話をし、事務総長は被爆者の語る壮絶な体験に時折表情を曇らせながら、じっくりと耳を傾けました。

原爆落下中心地である平和公園へ向かった事務総長一行は、炎天下の暑さにもかかわらず国連旗を手に待ち受ける大勢の長崎市民の温かい出迎えを受けました。田上富久長崎市長から同碑の説明を受け、事務総長は原爆落下中心碑に献花・黙とう後にスピーチを行い、「(被爆という)惨害をいかなる人にもいかなる場所にも、私たちが決して、二度ともたらしはならない」と述べ、核兵器の廃絶への強い決意を表しました。潘事務総長はこの後、追悼長崎原爆朝鮮人犠牲者の碑にも献花を行いました。

続いて原爆で全壊し再建された浦上天主堂を視察、被爆マリア小聖堂で記者会見に臨みました【写真⑨】。事務総長は長崎訪問を「もっとも心を揺さぶられた日」とであると述べ、特に被爆者が自らの壮絶な体験を平和と軍縮の推進に役立てようとする献身的な努力に感銘を受けたと語りました。そして、核兵器廃絶とその非合法化への取り組みへの決意を新たにすると述べました。

この後、一行はJR長崎駅に向かい、地元の女子高生による長崎の伝統芸能「蛇踊り」と多数の市民に見送られ、広島へと移動しました【写真⑩】。移動中の新幹線で、事務総長は過密日程の疲れも見せず、今回の訪日にニューヨークから同行している日本のジャーナリストたちのインタビューに応じました【写真⑪】。到着後、事務総長は広島市の主催する歓迎夕食会に出席するとともに、秋葉忠利広島市長と懇談を行いました。

翌6日(金)、事務総長は広島平和記念式典に国連事務総長として初めて出席、献花と挨拶を行い、「私たちはともに、グラウンド・ゼロ(爆心地)からグローバル・ゼロ(大量破壊兵器のない世界)を目指す旅を続けている」、「被爆者の方々が生きている間に核兵器のない世界を実現しよう」と呼びかけました【写真⑫】。式典には70カ国以上の政府代表、国際機関の代表、NGOや市民代表ら約55,000人が参加し、犠牲者を追悼しました。今年は国連事務総長に加え、核兵器保有国の米国、英国、フランスからも駐日大使や代表が初めて出席、核軍縮への機運が高まる中、被爆地から世界に向けた力強いメッセージの発信となりました。

事務総長はその後、**平和記念資料館**を視察し、元館長で被爆者の**高橋昭博氏**による体験証言を聞きました【写真⑬】。当時着ていた学生服や被爆体験を描いた絵などが紹介され、切々と語られる高橋氏の証言とともに原爆のもたらした惨害の大きさが伝わってきました。証言の終了後、高橋夫人からは国連へ贈る千羽鶴が手渡されました。

続いて事務総長は**広島国際会議場**で行われた**市民による歓迎セレモニー**に出席しました【写真⑭】。講演の中で、事務総長は核実験全面禁止条約（CTBT）の2012年までの発効や、国連安全保障理事会（安保理）サミットの定期的な開催など、核軍縮に向けた提案を表明しました。そして「子どもたちに軍縮を通じて平和へ至る道を教えよう」と呼びかけ、その具体例として、被爆者の生の証言を語り継ぐためには世界各国の言語に翻訳されるべきだと述べました。事務総長はその平和活動に対し**広島市特別名誉市民称号**を贈られ、一方、事務総長からは国連スタッフが平和への祈りを込めて折った**千羽鶴**が広島市民に贈られました【写真⑮】。

講演会の終了後、事務総長は**被爆者7団体代表者との対話**および**記者会見**に臨みました。会見で事務総長は、長崎および広島で行われた被爆者との対面について、「想像を絶する苦しみに耐え、並外れた勇氣と不屈の精神を持ち続けていることに心から敬意を表したい。そして、核兵器のない世界をつくろうとする皆さんの献身的な姿は、国連事務総長や世界の指導者たちがなすべきことを示してくれている」と述べました。この後、事務総長は**韓国人原爆犠牲者慰霊碑**を参拝し、原爆で命を奪われた犠牲者に献花とメッセージを贈りました【写真⑯】。

広島での最後の行事となる**市立舟入高校での平和交流会**では、生徒による箏曲演奏に続いて生徒が英語で意見発表を行いました【写真⑰】。広島に生まれ、原爆によってもたらされた苦難の歴史を学び育つ中で、その歴史を伝えることが使命であると感じ実践していると話す生徒に対し、事務総長は「未来のリーダーである皆さんに希望と平和のトーチを引き継いでほしい」と語りました。退出時には、事務総長から生徒に握手を求めるハプニングに歓声が上がると、とてもリラックスした雰囲気の中で交流が終了しました。

広島空港を立ち東京に戻った事務総長一行は、**グローバル・コンパクト・ジャパン・ネットワーク（GC-JN）**の主催するレセプション・夕食会に出席、集まった約40団体の出席者と意見交換を行いました【写真⑱】。GC-JNの**有馬利男議長**は歓迎の挨拶の中で、事務総長のリーダーシップの下、世界平和の推進に向け、今後企業として何ができるか議論と活動を重ねていると述べました。事務総長は、「ビジネス・リーダーや企業の皆さんの決断が重要だ。世界をリードする日本企業の技術やイノベーションの共有・展開を図りつつ、MDGsをはじめとする国連の目標実現に向け、合同でリーダーシップを発揮してほしい」と述べました。日本における事務総長とGC-JNとの対話は3回目です。10周年を迎えるGCの今後の発展についてなど参加者との活発な議論が繰り広げられ、非常に有意義なひと時となりました。

7日（土）午前、事務総長は歴史的な訪日を終え、成田空港からニューヨークに向けて離日しました。



広島市に贈られた千羽鶴は、ニューヨークの国連本部と日本の国連諸機関で働くスタッフが、それぞれ500羽ずつ折り、東京の国連広報センターで一つにまとめあげたものです



広島平和記念式典における国連事務総長メッセージ

広島の皆様、こんにちは。おはようございます。

私たちは今、この神聖な場所に身を置き、自らの目を見て、感じ、吸収し、そして深く考えます。

私は国連事務総長として初めて、この悲劇的な日から65周年を迎える平和記念式典に参加できたことを光榮に思います。そして今、深い感動に包まれています。

広島と長崎に原爆が投下された当時、私はまだ1歳でした。私がここで何が起きたのかを十分に把握したのは、しばらく後になってからのことでした。私は少年時代を朝鮮戦争のさなかに過ごしました。炎上する故郷の村を後にして、泥道を山中へと逃れたことが、私にとって最初の記憶の一つとして残っています。多くの命が失われ、家族が引き裂かれ…、後には大きな悲しみが残されました。それ以来、私は一生を平和のために捧げてきました。私がきょう、ここにいるのもそのためです。

私は、世界平和のために広島に参りました。

私たちは65年前に命を失った人々、そして、その一生を永遠に変えられてしまったさらに多くの人々に対して哀悼と敬意の念を表するため、一堂に会しているのです。命は短くとも、記憶は長く残ります。

皆さんの多くにとって、あの日はまるで、空を焼き尽くした閃光のように鮮明に、また、その後に降り注いだ黒い雨のように暗く、記憶に残り続けていると思います。私は皆さんに、希望のメッセージを送りたいと



思います。皆さんの一人ひとりに、平和のメッセージを送りたいと思います。より平和な世界を手にすることは可能です。皆さんの力は、それを実現する助けとなります。被爆者の皆さん、あなた方の勇気と不屈の精神で、私たちは奮い立つことができました。次の世代を担う皆さん、若い世代の皆さん、あなた方はよりよい明日の実現に努めています。

皆さんは力を合わせ、広島を平和の「震源地」としてきました。私たちはともに、グラウンド・ゼロ（爆心地）から「グローバル・ゼロ」（大量破壊兵器のない世界）を目指す旅を続けています。それ以外に、世界をより安全にするための分別ある道はありません。なぜなら、核兵器が存在する限り、私たちは核の影に怯えながら暮らすことになるからです。

そして、私が核軍縮と核不拡散を国連の最優先課題に掲げ、5項目提案を出した理由もそこにあります。

私たちの力を合わせる時がやって来たのです。私たちには至るところに新しい友や同志がいます。もっとも強大な国々もリーダーシップを発揮し始めました。国連安全保障理事会でも、新たな取り組みが生まれています。また、市民社会にも新たな活力が見られます。ロシアと米国は新しい戦略兵器削減条約に合意しました。

私たちは4月にワシントンで開催された核セキュリティ・サミットで重要な進展を遂げることができました。その成果を踏まえ、次回のサミットが韓国で開催される予定です。

私たちはこの勢いを保たなければなりません。私は9月に国連本部で軍縮会議の取り組みを支援するハイレベル会合を招集する予定です。そのためには、核軍縮に向けた交渉を押し進めなければなりません。それは、包括的核実験の禁止に向けた交渉です。また、兵器用核分裂性物質生産禁止条約（カットオフ条約）に向けた交渉でもあります。また、被爆者の証言を世界の主要言語に翻訳するなど、学校での軍縮教育も必要です。地位や名声に値するのは核兵器を持つ者ではなく、これを拒む者であるという基本的な真実を、私たちは教えなければならないのです。

皆さん、

65年前、この地には地獄の炎が降り注ぎました。今日、ここ平和記念公園には、一つのともしびが灯っています。それは平和のともしび、すなわち、核兵器が一つ残らずなくなるまで消えることのない炎です。私たちはともに、自分たちが生きている間、そして被爆者の方々が生きている間に、その日を実現できるよう努めようではありませんか。そしてともに、広島の炎を消しましょう。その炎を希望の光へと変えようではありませんか。核兵器のない世界という私たちの夢を実現しましょう。私たちの子どもたちや、その後のすべての人々が自由で、安全で、平和に暮らせるために。

どうもありがとうございました。



質問：被爆地・長崎を初めて訪問され、被爆者の写真など核兵器の使用がもたらす結果を目の当たりにされ、被爆者の声を直接耳にされた率直な感想を聞かせてください。

潘事務総長：核兵器の破壊力、影響力についてはこれまで様々に見聞きしてきました。しかし、写真や歴史的な証拠物を見ただけでは自分の気持ちや気持ちを正確に言い表すことはできませんでした。今、私は非常に重い気持ちでこの場に立っています。被爆者の皆さんがどんなに大きな困難や苦しみを背負ってこられたかを理解することは、筆舌に尽くし難いことです。

被爆者の皆さんは一見するとお元気そうに見えましたが、皆さんの負われた傷の写真を拝見し、私は心の中で泣いていました。受け入れがたいほどの傷です。そしてそれこそが、地球上から核兵器が一つ残らずなくなるまで、私たちがもっともっと努力しなければならない理由です。そうした意味で、世界のリーダーたち、とりわけ核保有国のリーダーたちが近年、イニシアチブを発揮している

長崎での記者会見から

潘基文事務総長は8月5日、国連事務総長として初めて被爆地である長崎を訪れました。原爆資料館で被爆の惨状を視察し、被爆者との対話の席でその体験にじかに触れた事務総長は、原爆落下中心地である平和記念公園でスピーチを行い、核兵器の廃絶への強い決意を表しました。その後、浦上天主堂・被爆マリア小聖堂で行われた記者会見で、事務総長は長崎訪問を「もっとも心を揺さぶられた日」と述べています。以下は記者会見における一問一答からの抜粋です。

のは心強いことです。核軍縮および核不拡散に関する安保理首脳会合に始まり、今年4月にワシントンD.C.で開催された核セキュリティーサミット、5月のNPT再検討会議と、これまでに前進を見せてきました。こうした様々な機会を通じ、核軍縮を促進するための高い、しかし現実的な指標が設置されています。国連事務総長として私が提出した5項目提案が、国際社会の支援を得てさらに推進されることを期待しています。

今回、長崎を訪れ、核兵器のない世界を実現するために努力するという私の信念と決意はさらに深まりました。

* * * * *

質問：日本政府はこのほど、核不拡散条約（NPT）未加盟のインドと原子力協定の交渉を始め、被爆地の人々は強く反発しました。世界に核兵器廃絶を訴えながら、米国の「核の傘」に守られ続けていることに矛盾を感じ、政府の主張に説得力が欠けると指摘する被爆者や専門家もいます。唯一の被爆国である日本政府の取り組みをどのように評価されますか。

潘事務総長：日本とインドの合意は二国間のものです。国連としてはNPTが普遍性をもつことを望んでいますが、残念ながら同枠組みに加わっていない国もあります。核エネルギーの利用を促進する二国間の取

り決めには完全なセーフガード合意が伴うべきで、それによって、テロ活動に関わる国やテロ組織に原子力発電の技術の転用や核エネルギーや物資の拡散が広がらないようになっていきます。私は日印両政府がこうした合意を確実に実行することと理解しています。NPTへの加盟が全面的に実行されるよう取り組んでいく一方で、それまでの間は、より強力なセーフガード合意やIAEAの追加議定書などがそうした役割を果たしていくべきだと考えています。

* * * * *

質問：事務総長が提唱されている核兵器禁止条約の締結を実現可能にするため、これから具体的にどのような取り組みが必要ですか。

潘事務総長：まず、ある程度の準備作業が必要です。NPT再検討会合での要請を踏まえ、9月24日にニューヨークの国連本部で軍縮会議を支援するためのハイレベル会合を開催する予定です。閣僚級以上の軍縮会議をジュネーブ以外で開くのはこれが初めてで、首脳級の参加があることも期待しています。こうした機会を通じて、国連は核に関するアジェンダを前に進めたいと考えています。完全で普遍的な核軍縮の実現を目指して、関連項目も含めて議論を継続させていくことが何よりも必要です。

早稲田大学での講演から

潘基文事務総長は8月4日、早稲田大学と国連が主催する講演会「『平和と軍縮』と学生との対話」に出席しました。会場となった井深記念大ホールには、450名を超える参加者と報道関係者が詰めかけ、事務総長のメッセージに熱心に耳を傾けました。事務総長は「広島と長崎の記憶を伝え続け、核兵器のない世界を実現する上で、世界は日本の若者を必要としている」と述べ、日本の若い世代に向けた力強いメッセージを送りました。以下は事務総長の講演からの抜粋です。

日本は、核軍縮の分野において、特別で唯一無二の役割を担っています。私は1945年の広島、長崎の惨事を記念するため、そして、「もう二度と許さない」と言わなければならないすべての人々に加わって、声を発するために、日本を訪れました。

私の最初の記憶のひとつは、朝鮮戦争の中、火に包まれた村を山中へと逃れ、自分たちの住むところをつくったことです。若い方々には、恐怖、混沌、戦争の惨禍を想像することは難しいかもしれません。皆さんがそうした経験をもたないことを嬉しく思います。できれば誰にもそんな経験はして欲しくはありません。

しかし、この地域のすべての人びと同様、皆さんは核の脅威について、よくご存知です。私は、国連事務総長に就任する前から、長年にわたって、その脅威を終わらせようと努力してまいりました。

軍縮とは難し過ぎる問題であるという人々がいます。非現実的な目標であり、少なくとも私たちが生きている間は決して実現はできない、と。それは違う、と私はここで申し上げます。確かに、軍縮は困難です。しかし、不可能ではありません。

2008年10月、私は軍縮に関する5項目プランを提示し、安全の拡大、検証、核軍縮の法的枠組の確立、透明性、通常兵器に関する勧告を行いま

した。それ以来、いくらかの歩みが見られます。

核不拡散条約（NPT）の再検討会議が5月、成功裏に終わりました。昨年、安保理は核軍縮と不拡散に関する歴史的な会合を開催しました。ロシアと米国は新START条約を締結しました。私たちはワシントンで開かれた核安全サミットで重要な歩みを進めました。これらの複数の出来事により、私たちは核兵器のない世界に少しずつ近づいています。私は自分の仕事は、この歩みのペースを速めることである、と考えています。

核戦争はすべての人類にとって破局をもたらすものであることは明らかです。それこそが国際的な法律的意见が明確である理由です。民間人は法律、人道、人々の良心の原則によって保護されるのです。

ある者が核兵器を保有することは他の者が獲得することを奨励します。それは、核拡散と、伝染的な核抑止ドクトリンの蔓延を招きます。ここ北東アジアにおいて、私たちはその脅威をよく理解しています。国連は朝鮮半島の情勢をととても懸念しています。私たちは、6者協議が可能な限り早急に再開されるよう期待しています。

そして、私たちは、私たちの生きている間に、核の脅威のない世界が到来することを希望しています。これ



が私の本日の、そして、今回の訪日を通じてのメッセージです。

軍縮は、国際の平和と安全の構成する最も重要な要素です。軍縮は、すべての人びとに安全な世界を実現するため、実際に必要なことです。

私は、日本人の若い世代の皆さんが、ご両親や祖父母の皆様が点火した灯を受け継いでいかれるよう期待します。軍縮を先導するリーダーとなってください。被爆者の物語を語り継いでください。その証言は、核の脅威に対する、最も写実的な議論となります。

広島と長崎の記憶を生きたものとして留めるために、世界は、日本の若い皆さんを必要としています。核兵器のない世界を実現する約束を守るために。

皆さんが自らの行動や思考の範囲を広げられるよう期待しています。皆さんの世代は国家領土を超えて、物事を考える必要があります。国際社会は皆さんのリーダーシップとビジョンに期待しているのです。

これからも、一緒に頑張りましょう。

国連広報センター新所長よりごあいさつ

潘基文（パン・ギムン）国連事務総長の任命を受け、2010年7月16日、東京の国連広報センター（UNIC）の新しい所長に山下真理氏が就任しました。20年にわたる国連でのキャリアを生かし、当センターを通じて国連をより身近な存在として感じていただけるよう努めてまいります。

私と国連との出会いは今から20年以上も前に、国連への就職をめざす一人の学生として国連広報センターを訪れた時のことです。その後、世界各地で国連の仕事に携わり、このたび国連広報センター所長に就任する機会に恵まれたことを大変名誉に感じています。

日本は国連にとって重要な国であり、その意味で、国連事務局の日本における出先機関である国連広報センターは大きな役割を担っていると言えます。昨今は“内向きな日本”と言われていますが、外から見れば日本は唯一の被爆国であり、敗戦国でありながら短期間で復興、経済成長を成し遂げた世界の優等生です。国連通常予算における日本の分担金率は、加盟当初およそ2%でしたが、現在は12.53%で米国に次いで2位となっています。このような国際社会における日本の重要性から、国連事務総長は毎年日本を訪れ、今年は事務総長として初めて広島平和記念式典に出席し、長崎も初めて訪れました。

日本の国際貢献は様々な形をとってきました。人的貢献でいえば、事務総長特別代表を務めた明石康氏、国連難民高等弁務官として活躍した緒方貞子氏などは誰もが尊敬する日本人国連職員です。もちろん、国連ファミリーでは、あまり知られていないところでも数多くの日本人が活躍しています。2007年に設立された国連ネパール政治ミッション（UNMIN）には軍事監視要員として陸上自衛官が派遣されています。アジア地域の安定維持に重要な役割を担う中国とインドに挟まれた要衝に位置する国



日本を公式訪問中の潘基文（パン・ギムン）国連事務総長と握手を交わす山下真理 国連広報センター（UNIC）所長

連ミッションに、日本がアジアの一員として積極的に貢献していることは、ネパール政府のみならず一般市民からも歓迎されています。1999年以来、東ティモールの国づくりに国連平和維持活動（PKO）を通して多くの日本人職員が活躍し、現在では事務総長副特別代表のポストに日本人が就いています。また、アフリカで近年最も注目されるスーダン南部独立を問う住民投票（2011年）の準備に直接関わっている上級政務官も日本人であり、事務総長官房室でも日本人職員が活躍しています。PKO局の政策部長も日本人女性が担っています。数はそれほど多くなくとも、国連における戦略的に重要なポストで日本人が活躍することが、日本の国際貢献の核となっています。事務総長も日本のより積極的な支援とリーダーシップに期待を寄せています。

国連広報センターでは、このように現場で活躍する日本人の姿を通して、日本の皆さんに国連をより身近に感じていただけるよう努力していきたいと思います。皆さまからのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

国連広報センター所長 山下真理



発行：国際連合広報センター

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-70 国連大学本部ビル8階

TEL: 03-5467-4451

FAX: 03-5467-4455

URL: <http://www.unic.or.jp> / E-mail: unic.tokyo@unic.org